

ハノイの「村」に暮らそう

藤田麻衣

ベトナムの首都ハノイ、西湖のほとり。車は入れない細く入り組んだ路地を、スピードを落としたバイクや自転車が行きかう。市中部から車でわずか十分ほどだが、そこは紛れもない「村」だ。村の歴史は古く、近々の花市場に出荷する植木や花の栽培、養蚕、金魚の飼育などで人々は生計を立てていた。だが、ベトナムの対外開放が軌道に乗ると、外国人向けに一軒家を建て、貸そうとする人々がでてきた。中心部の喧騒や狭くて高いサーブスアパートに飽き足らず、閑静な環境と広い住居を求める外国人（主にヨーロッパ人）が移り住むようになった。かくして、ベトナム人と外国人が共存する村ができあがった。

のどかだった村の人々の暮らしも、外国人が入ってきたことで徐々に変化してきた。毎朝、天秤棒を肩に担いで現れる野菜売り、「パンはいらんかねー」と高らかな声を響かせるパン売りのおばちゃんなど、伝統的な商売は依然として健在だが、村で暮らす外国人向けの新たなビジネスが登場し、村の人々の所得向上に一役買っている。ここでは、筆者がこの村で暮らし一年の間に垣間見た人々の暮らしのひとこまを紹介しよう。

よろずや。村の住人が帰宅するとき必

ず通る村の入口という絶好の立地で、ミネラルウォーター、パン、牛乳、野菜、せっけんや洗剤など、日々の生活に必要なものはほぼ手に入る。街中のよろずやとの違いは、外国人向けの品揃えを充実させていることだ。ヨーロッパ産のワインやパスタなどを豊富に取り揃え、ベーカリーも併設した。クリーニングも取り次ぎ、電話一本で配達もする。充実したサーブスで、ちょっと不便なこの村に住む外国人の生活を支えてくれる心強い存在だ。

バイクタクシー。筆者が家を出ると、いつも決まった数人のバイクタクシーが「定位置」で待機しているのが目に入る。村外のバイクタクシーは中まで入ってくることはできず、村外で待つしかない。気前よく支払ってくれる外国人客を乗せることができるのは村のバイクタクシーの特権であり、縄張りがあるのだ。利用する側の外国人にとっても、料金交渉は簡単、運転のくせもわかっている顔見知りのドライバーはありがたい。いっぽう、月曜日の午後はグエンチャイ通りの研究所、火曜日の朝はハノイ工科大学近くのベトナム語個人講師宅、といった具合に、こちらのスケジュールも行き先も把握したバイクタクシーたちが待ち構えているという一種の息苦しさからも逃

れられないのが村の暮らしだ。

世帯単位でみると、一家でさまざまな業種をかけもちしながら多くの収入源を確保しているケースが多い。ある夫婦は、自宅の前にフランス風建築の家を建て外国人に貸すことで家賃収入を得ていたほか、夫は建築士として外で働き、妻は自宅の広い庭で植木を栽培し、さらに、早朝はフォアの店を営んでいた。自宅の土間のような一角にプラスチック製の小さなテーブルとイスを並べただけの即席店舗だが、毎朝大鍋に作る自家製スープはなかなか美味で、いつも早朝から村のベトナム人たちで賑わっている。

筆者が帰国してから五年以上がたったが、今でも調査の合間を縫っては時折村を訪れている。近所に五つ星のシェラトンホテルが開業したため、周辺を訪れる外国人の数は増え、地価もさらに上がった。近所に外国人向けの立派なミニスーパーができ、よろずやはちよつと苦戦しているようだ、などと新たな発見を楽しみ、昔の隣人たちと近況を語り合いつつ、温かくも少しだけ窮屈な「都会の村」の生活を懐かしく思い出すのである。

（ふじた まい／アジア経済研究所地域研究センター）